

Ⅰ 次の文章を読んで、後の問い (問1～9) に答えよ。(配点 70)

いつたい自然とどうもあらうことは、どういうことだろうか。ここに紹介しなければならぬ法則が二つある。一つは **甲** である。これまで私は、水と緑と土は **乙** である、とはしばしば書してきた。なぜなら、水のないところには、砂漠や岩石の露出した台地であり、そこには緑も土もない。緑のないところについても、やはり砂漠や裸の岩山であり、そこには土も水もない。土のないところといつても同様であり、三者はそうした関係にある。それゆえ「緑を失った文明は亡びる」ということは、「水を失った文明は亡びる」といいかせてもよいのであり、正確にはそれは、「土壌の生産力」の語につきまる。そして土壌の保水力も、基本的には土壌の生産力と **乙** である。こうした土壌の性質をさらに詳しく考えるために、しばらくは四億年の言にサカサガりたい。

いまから約四億年の昔、地球の陸地にはじめて生物が湧からはじまつてきたとき、陸地は一切の有機物のない、ガツガツの岩石だけの死の世界だった。最初の陸地植物の根はその岩と岩とのすきまに食い込み、岩石を砕く働きを止め、土壌を築きながら、しだいに緑面をのぼりはじめた。これが土のはじまりである。そのようにして土壌が形成されはじめて、そこからまた緑が生えて、岩と岩とをつなぎ止める働きをしながら、しだいに緑面をはいあがっていた。緑がふえれば土も厚くなり、土壌が厚くなれば緑もまたやわらした。やがて動物たちも登場し、進化しながらその種類も数も増していった。何千万年もの間には、雨や風の侵食もしたいに緩和されるようになり、侵食が緩和されれば、それはさらに土壌を厚くさせた。そのようにして土壌が厚くなると、雨は土にたつぷりと吸い込まれ、水は豊かに陸地に存在するようになった。そして、水を含んだ土壌は、 **Ⅰ** 豊かな緑を育てさせた。

さて、こうした緑と土の関係の中で、一つの法則が存在した。それは、いかなる動物も土壌の形成に参加し、侵食防止に力を貸し、もしもそれを担む生物がなければ、その生物が先に亡びた、という法則であった。自然選択の法則もまた、この法則を補強した。

この法則性のもと何億年もの間、土壌は形成されつづける。土から生まれたものはすべて土壌の形成に参加することで、さらに新たな生命をバイヨウした。水と陸上の関係とは、そうした陸地の物質循環の関係であった。

四億年にわたるこの緑と土の積み重ねの結果、いまから約1億年前に原始人が登場する。それからさらに九千万年たつて文明人が出現する。遅くても、自ら緑地を築いていくこの文明人の出現によつて、地球の土壌形成作用は大きく後退し、ここから動物の種類の数も急速に減りはじめる。そしてこのときから、土というものは放っておけばいずれ大地からハがれ、失われていくものに変つたのである。

だが、石の法則がその後の文明人に適用されなかったかといえは、否である。土壌の生産力を失った文明はその地に姿を消しかなかつたことは、歴史の証言するところである。メソポタミアも、ギリシャ、ローマ、クレタ、シチリア、カルタゴなど、連綿と栄えた王国や都市を見ればよい。いずれも土壌の生産力を失つて亡びている。直接には水不足が食糧不足 (これは同じことである) または水害で恩の根を止められている。まことに土こそは、大膽なエルギートの陸地の唯一のチカラ

きであり、また汚物を還元できる唯一の働き手でもあった。

Ⅱ 水と緑と土の、この物質循環を乱したとき発生するものは何であろう。それがゴミである。ゴミというものは人間の活動が自然のサイクルにのらなくなつたところから発生するものである。したがって人間の作り出した排水も、ゴミであった。

さて、こうしてひとたびゴミがばらまかれたとき、それを人工で処理しようとするれば、そこにはもう一つの法則が存在した。「Ⅲ」**Ⅲ** という法則である。それは熱力学の第二法則に示されている。ごく簡単に説明すれば、真夏のクーラーがよいよゝゝ気温を上昇させていくあのメカニズムである。たとえゴミ処理施設をいくら作るうが、その灰の処理、そのまた灰の処理が必要になり、そのため製鉄廠が、石油化学コンビナートが、自動車も活動し、そのためダムが作られ、森林が払われる。それらはめぐりめぐって汚染物質になり、最終的には熱汚染となつていよいよ土地を失わせていく。いじればいるほど矛盾を増大させるということであり、これを物理学用語でいえば、エントロピーを増大させるという。

水問題に典型的に示されているように、今日の都市問題はいずれものよゝゝとして矛盾を増大させてきた問題であった。ゴミ問題ばかり、環境問題ばかり、交通問題もまた、しかりである。もはや速くは自然から勝手なものはなすき出して勝手なところへ廃棄するところへ、モノの移動を大きくする土地利用のありかを見開かれていたのであり、交通需要を小さくする方向こそ、この二つの法則が示す土地利用の方向であった。

たとえば交通問題とは、東京人間がなぜ九州の野菜を食べなければならぬか、逆に九州の野菜がなぜ東京にまで出荷しなければ成り立たぬかという、土地利用の問題だといえる。激増する交通需要に対し、海も陸も空ももう満タンである。そしてあの、静岡県の蒲原、由比、興津あたりの海岸線を見ること。津と山との間の車道わずか二〇〇メートルといったせまい土地に、新幹線、東海道本線、東名高速といったように幹線が五本も六本もひしめいている。日本をこつすに戦争はいらぬ、そこへ懸架を一箇所とせばすむ、という案である。高度入システム化社会の盲点がそこにある。

Ⅲ 都市は、本来的には都市とその周辺部の産物で最低消費はまかない、その廃棄物も周辺の土壤に還元できるような小さな循環の土地利用——自己完結型土地利用こそ目指すべきではないか。水や毎日の野菜のような、今日明日の生命にかかわるものだけは自己の足もとに確保し、その上でより豊かなものを遠方から運び込むというのが順序ではないか、というところであった。下水道でいえばまず足もとの土壤を「豊」にするよう努力を重ね、とうとう溢れぬものだけ大割下水道にのせるべきであらう。もちろん東京の下水処理場で消費した電力は、ゆづに一つの発電所を建設するに匹敵する。石油は「一」のことがあれば、東京は丹水もつぎと化する。

私たちはゴミは行政が処理すべきものと考えている。だがつい最近までの案でも、産廃で小まめに処理していたからこそ、自然との関係にも一定の調和が保たれていた。それらを「カ所」に集めて処理しようとするれば、いやでも矛盾は増大する。

二つの法則はこのように、日本の詳細な問題に対しても、価値観の問い直しも現っていたのである。

(沼田邦子「水の文化史」)

問1 傍線部 a・d に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑧のうちから、それぞれ一つ選べ。解答番号は ・ 。

a サカノボリ

- ① ソヤな人物 ② ソエになる ③ ソロをもぐす
 ④ 結のソシヨウ ⑤ ソンヨウ費用 ⑥ 桑屋のソセキ
 ⑦ 投字としてのソシツ ⑧ 危険をソシとする

d がれ

- ① 少教匠のハクガイ ② ハクナエウ選定 ③ ハクラン樂記
 ④ ハクシヨウ女人 ⑤ 地位をハクダツする ⑥ 経歴にハクがつく
 ⑦ ハクニエ喝采 ⑧ 團圓の名ハクダツ

問2 傍線部 b・c・e・f のカタカナを漢字に直せ。カタカナの後に示した漢字のうらみ、最も適切なものを、それぞれ一つずつ選べ。ただし、b・c・e・f それぞれについて各音しなれば加点しない。解答番号は ～ 。

b バンシヨウ

- バン ① 晩 ② 盤 ③ 番 ④ 磐 ⑤ 菰 ⑥ 万 ⑦ 版 ⑧ 播 ⑨ 伴

- シヨウ ① 障 ② 章 ③ 生 ④ 涉 ⑤ 象 ⑥ 詳 ⑦ 省 ⑧ 尚 ⑨ 称

c バイヨウ

- バイ ① 陪 ② 杯 ③ 培 ④ 媒 ⑤ 榭 ⑥ 買 ⑦ 売 ⑧ 倍 ⑨ 狽

- ヨウ ① 糶 ② 要 ③ 陽 ④ 妖 ⑤ 容 ⑥ 養 ⑦ 洋 ⑧ 備 ⑨ 幼

e チエキ

- チク ① 築 ② 畜 ③ 逐 ④ 蕃 ⑤ 竹 ⑥ 筑 ⑦ 播

- セキ ① 席 ② 績 ③ 厩 ④ 夕 ⑤ 寂 ⑥ 藉 ⑦ 楮 ⑧ 咳 ⑨ 責

f シンシ

- シ ① 私 ② 誌 ③ 詞 ④ 師 ⑤ 資 ⑥ 司 ⑦ 至 ⑧ 視 ⑨ 指

- シン ① 新 ② 異 ③ 深 ④ 針 ⑤ 身 ⑥ 進 ⑦ 信 ⑧ 親 ⑨ 苾

問 3 空欄 **I**、**II**、**III** に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同一番号は一度しか使えない。まだ、定着しなければ加算しない。空欄 I の解答番号は **11**、空欄 II の解答番号は **12**、空欄 III の解答番号は **13**。

- ① とろろで ② なまなら ③ しかし ④ ろろこ
⑤ とろろが ⑥ やはり ⑦ ただし ⑧ まごこ

問 4 空欄 **甲** に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は **14**。

- ① 本勝が自然にもたらす法則
② 地球の土壌に属する法則
③ 動植物の生存方法に属する法則
④ 土壌と文明の発達に属する法則
⑤ 土壌形成を行う水に属する法則

問 5 空欄 **乙** に入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、一つ選べ。解答番号は **15**。

- ① 対象語 ② 同義語 ③ 対義語 ④ 位相語 ⑤ 対照語 ⑥ 対立語

問 6 空欄 **丙** に入る文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は **16**。

- ① 人間が自然のサイクルを乱すと都市が壊れる
② 土壌の生産力を衰へさせると自然の調和が乱れる
③ コミの増大は環境だけでなく都市をも壊す
④ 自己完結型土利利用はすべてコミが削減される
⑤ コミ戦争をすればますますコミが出る

問 7 傍線部 A 「この物質循環」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 人間が地球環境を自分たちの都合で変えたりとによって、土壌そのものだけでなく動物自体も壊滅させたりというのは、歴史的に繰り返されてきたということ。
- ② 四億年の昔から、土壌・植物・水が相乗効果的に働いて、地球の自然を豊かにし続けていたこと。
- ③ 地球の形成に関わる土壌・植物・水の関係と互恵ものは地球土から姿を消し、それに代わる新たな種の誕生が、四億年前から繰り返されているということ。
- ④ 長い間、土壌・水は動物を生み出す基盤でもつたが、文明人の出現によって地球からそれらを「はすものへと委ねた」ということ。
- ⑤ 土壌は大気エネルギー・汚物を保持し、また空気に戻してはき出すことによって、動物の命を繋ぎ返し生み出しているということ。

問 8 傍線部 B 「高度システム化社会の盲点」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 一般に集中化されたシステムを構築するということによって生じる問題というのは、誰の目にも触れることにならないためにどの点に問題が存在するのかわからないということ。
- ② 手の移動を小さくするように土地利用することだが、今日の都市問題を解決する方向性でもありそれを誰もが盲点としているということ。
- ③ 我々は便利さを追求するために土地を利用し、その結果できあがった高度なシステムが疲弊しているということに気づかないまま生活しているということ。
- ④ 水問題に無関係に示されるように今日の都市問題の多くは、生活上の問題を高度な技術で繰り返して解決する人間が引き起こしたものであり、この事実は知られていないということ。
- ⑤ 土地利用の問題がゴミ処理や交通需要の問題と深く関わっていることは明らかであるが、それらを扱う輸送の社会システムにおける欠陥に誰も気づいていないということ。

問 9 本文の内容に真直するものを、次の①～⑧のうちから、二つ選べ。ただし、解答の順序は問わないが、空白には必ず数字を記入しなさい。解答番号は , 。

- ① 「水を失った文明は滅びる」というのは土壌の形成に関連して述べられた文明論ではあるが、実際に「水を失った」文明は存在しない。
- ② 四億年前以来、土と水と緑は互いに影響を及ぼすことで地球を形成してきたが、文明人の出現によって、地球の土壌形成作用は大きく後退し、その性質までも変化してしまった。
- ③ 地球が形成される中で生まれた法朗の一つに、土壌の形成に参加しない生物は真つ先に滅びるということがあるが、これは自然界における弱肉強食の法則に叶っている。
- ④ 土壌の生産力を失った文明はその地に姿を消したといわれているが、実際の原因は水不足か食糧不足であつて、土壌の生産力が文明に及ぼした影響というのは、それほど大きいものではなかつた。
- ⑤ 土壌の形成は自然のサイクルによつてなされており、このサイクルから外れたものは、高度なシステムで処理するべきである。
- ⑥ コミを人工的に処理するとあらたにゴミを産み出すことになり、自然との調和を保つことは難しくなるので、土壌利用の仕方を考える必要がある。
- ⑦ コミをどのようにして処理するかという現代都市の課題は決して、大きくなりすぎた交通需要を小さくすることと同じ、自分たちに身代を身代で処理する方法が一般的である。
- ⑧ 我々は、ゴミは行成が処理するべきものと考えているが、その一方で自己完結型の土地利用を目指しつつ自然との調和を図り、文明の活性化も考えなければならない。

II 次の文章を読んで、後の問い(問1～9)に答えよ。(配点 75)

私達人間が求めるのは、たんに「うまく」生きること、つまり費用対効果を計算して「要領よく」生きることだけではない。私達は、「うまく」生きることよりも、むしろ「よく」生きる」と、「いい人生」を求めている。「よく」生きるという日本語が不自然なら、「人間らしく」生きると言ってもいい。

「いい人生だ」と自分で満足することばかりで、「いい人生でしなね」と人からも祝福されるような生き方。ところで、どのように意識している。いならにかかわらず、私達は、そうした生き方を求めている。

このように「よく生きる」「いい人生を歩む」ということは、もちろん「善く生きる」つまり善を行い・悪を慎んで生きる、ということではない。生きが得られるような「いい人生」を送りたい。私たちが言う「悪い」「いら」という形容詞の感嘆は、道徳的にみて「善い」ということに回収できない。道徳的に何かかきでありさえすれば、すなわち「いい人生」だなどというのはいわば「道徳的、とでもいうべき、とりかた」と道徳宗教の信奉でしかない。道徳的にあることは、「いい人生」にこそ、なぞらふべきではない。

しかしながら、道徳的であること、つまり善悪を見極めし悪を慎もうとすることは、「いい人生」と無関係なものではない。ただし、善哉・無頼の、ひいには善悪の行いを重ねながらも、究美した「いい人生」を送つたと思える人も少なくはない。しかし、だからと言って、道徳的であることと、「いい人生」を歩むことは、論理的に無関係だ、とするのは早計にすぎない。

「いい人生だ」「いい人生でしなね」と、自分の生きが得られるためには、とにかく生が保持されねばならない。しかも、たんに一個の生物として生存するというのではなく、人間としての生が保持されねばならない。いい人生のためには、人間としての存在の承認が不可欠である。しかるに、人間としての自分の存在の承認を自分ひとりだけで働き出すことは、できない。

私達は、誰しも互いに、相手に対して「何ものかとして」存在、対他存在である。そもそも、自己が成立しているということは、他者によって「何ものかとして」意識されて「ある」ということを意識して「ある」ということに他ならない。そうでなければ、自分の存在を保持するということには、甲が承認される、ということにはありえない。

善哉・無頼をとる重ねながらも究美した人生を送つた。しかし、そうした人生が可能だつたのは、その人の存在を、消極的であれ積極的であれ、承認しながら関わつた人々のおかげでもある。その昔レールは、主人と奴隷の関係について、こう述べた。いわく、奴隷は、いつも主人の欲求を昏昧に理解している。すなわち、Iは、自分の姿がIIに映ることを欲しており、IIIがIVに「どうして」することを欲しているか、といふ心配を察している。そしてVは、VIが欲している仕方でVIIに反応。だからこそはじめてVIIIは、IXでいられるのだ、と。無頼派の人生にかんしても、事態は同様である。

たしかに、ある種の無頼派・破壊型の人生には、私たちに惹きつける魅力がある。しかし、その

勢力の多くは、その人生で達成された希有の価値に由来しているのであって、反道徳的であること自体に由来しているのはない。たしかに私たちは、酒色を離業し遊んだ作家たち、たとえばボートレースや競口安否の作者に人生に救われる。しかし、それらとくたに救きつけられている人も、誰一人面会者も来ない医療刑務所の中で、禁断症状にたうまわっている無名の受刑者の人生を、いい人生だとは感ぜず。

頼まれな才能をもった無頼漢にあこがれるあまり、道徳的でもあること、いい人生を送ることは無関係だ、と思ってしまうなら、それは、幼児の養育にあこがれて、自らも幼児のようく振る舞う、ということと異なるところはない。

道徳的であること、つまり善悪を見極めて悪を慎もうとすることが、各自の人間としての存在の承認を危うくする事象への安全網（ゼリーネット・ネット）を織りなす。この安全網なしには、「いい人生」というときの生の保持すら危うくなる。道徳的であることと、生の肯定とは、決して無関係ではありえない。

道徳的であること、つまり善悪を見極めてやうとすることは、なほよりもまず悪しき行為への道徳的感受性を必要とする。しかるに、悪とは、その人の人間としての存在をも危うくさせ、あるいはそうした存在をキーンとして、いわれなき苦悩を生じさせるものもある。悪が横行するときには、必ずいわれなき苦悩が生じ、そうした苦悩は、まさに「いわれなき」がゆえに「悪」、言葉も促かなく、宛先も定まらない叫びを吐く。

したがって、善悪を見極めてやうとするということとは、そのよきな呻きへの感度を、ほんの少しであれ上げようとすることを伴う。先に「道徳的感受性」と呼んだ私たちの情報回路の一つの、しかし極めて重要な機能は、明も言けられなかつた苦悩の呻きの感度である。私たちがこうしよう「悪びやり」とか「やもした」と呼んでいる感度の少なからぬ部分は、こうした感受性のキーンに由来する。

そうであるかぎり、道徳的であること・善悪を記憶りようとすることは、善悪の概念からして既に、人間としての成長・成熟と不可分である。しかるに、明も言けられなかつた呻きへの感度が上がって人間として成熟していくことは、とりも直さず、他者との間柄がより豊かになり、呼応可能性の幅が広がることを意味する。そのように人間として成熟し間柄が豊かになっていくことが、いい人生を送ることと無関係であるはずはない。

もちろん、いかに人間における相互の存在承認が大切であらうとも、それぞれの人生を生きるのは、それぞれの責任ではある。私の人生を、誰か他の人に生じてもらうこともできないし、他人の人生を、その人の代わりに私が生きることもできない。

人生を歩むのは、私、あなたという個人であって、自分の人生は、どこまで行っても自分ひとりだけが歩むしかない。それは、胃に穴があいたときの痛みの場合と同じである。私の胃に穴があいたときの激痛は、私一人が歩むしかない。激痛に身をよじりながら、思わず、「誰か、この痛みの半分をいから、私の代わりに引き受けて痛んでくれないか」と口走つたとしても、実際に痛みの半分を引き取ってくれる他人はいない。この限りで言えば、私たち各自の体験は、どこまで行っても絶

私的であり、各自は、それぞれに単独者である。

しかし、その場合すら、「できるものなら、極限の金額でも代わって引き受けてあげたいのだ
が……」と願う祈る声は、いる。少なくとも、いることは自明である。そのつと他者に対して一
何ものかとして一あると、その「何ものか」のうちには、「誰か、この極限の半分以上も引き受け
て……」と願っている者、そうした呻吟に接して祈っている者を含んでいる。

繰り返せば、各自は、それぞれに単独者である。しかし、各自が「それぞれに」単独者だとい
うのは、「お互いに」というふうでもある。「お互いに」といふ言葉の「お互い」を廢棄するような仕
方で、「再婚で」というフレーズにだけ無意味なものを付け加えているとしたら、それは、人間ら
しく生きることを、むしろ實現させる非難である。

ただし、この極限の、言葉にならない呻吟を聞きとめてくれる人は、いなかった……。そう言
いたくなる疑念は、喉をよぎっている。しかし、だからと言って、自分ひとりをお互いに」と
いう相互性の圏外に、自分ひとりだけで命をせまうとしても、自分の生を肯定してくれる声を聞くこ
とには到らない。

道徳的であらうとするこゝ、善悪の見極めをおおりにしない、というこゝは、その場では聞か
ず聞けられなかった声で、もう少しだけ敏感になることを待て。そして、このこゝは、自分も人間
として、そのこゝを離れはして一何ものかとして一あることだから、そのうえでどうしても単独者
である、という再婚より深く理解をせよと。そうした理解が深まること、いい人生を送る
こと、道徳的に無難であるはずはない。

(大塚龍一「善と悪—倫理学への招待」)

問1 傍線部 a のカタカナを漢字に直せ。カタカナの後に示した漢字のうちから、最も適当
なものを選び、それぞれ一つずつ選べ。ただし、a 1 a それぞれについて完全しなければ加算しない。
解答書は [21] 1 [30] 。

a コクケン

コク ①口 ②交 ③公 ④頑 ⑤高 ⑥組 ⑦更 ⑧行 ⑨考

21

ケン ①組 ②欠 ③皿 ④欠 ⑤試 ⑥決 ⑦線 ⑧潔 ⑨結

22

b トウサク

トウ ①刀 ②投 ③冬 ④東 ⑤当 ⑥盗 ⑦透 ⑧倒 ⑨調

23

サク ①作 ②紫 ③兼 ④冊 ⑤剛 ⑥昨 ⑦酢 ⑧搾 ⑨精

24

c キンン

キ ①氣 ②既 ③機 ④期 ⑤台 ⑥祈 ⑦毀 ⑧詭 ⑨器

25

ン ①孫 ②付 ③運 ④存 ⑤噂 ⑥村 ⑦尊 ⑧樽 ⑨損

26

d センレン

ゼン ①十 ②報 ③運 ④先 ⑤尊 ⑥洗 ⑦宜 ⑧戰 ⑨染

27

レン ①運 ②練 ③廉 ④恋 ⑤隣 ⑥運 ⑦聲 ⑧聯 ⑨廉

28

e コリヨ

コ ①古 ②故 ③個 ④孤 ⑤呼 ⑥誇 ⑦顧 ⑧己 ⑨雇

29

リヨ ①旅 ②呂 ③侶 ④屨 ⑤慮 ⑥録 ⑦問 ⑧紹 ⑨招

30

問2 空欄 に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 他者に対して「何ものかとして」あること
- ② 他者に対して「何ものでも」ないこと
- ③ 自分に対して「何ものかとして」あること
- ④ 自分に対して「何ものでも」ないこと
- ⑤ 自分に対して「他者として」あること

問3 空欄 1 には、「主人」(Xとする)・「奴隷」(Yとする)のどちらかの語が入る。その組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① I I X II X III Y IV Y V I X VI I X VII Y VIII X IX I X
- ② I I X II Y III X IV I X V I Y VI I Y VII X VIII X IX I X
- ③ I I X II Y III Y IV I X V I Y VI I X VII X VIII X IX I X
- ④ I I Y II X III X IV I Y V I X VI I Y VII Y VIII Y IX I Y
- ⑤ I I Y II Y III Y IV I Y V I Y VI I Y VII Y VIII Y IX I Y
- ⑥ I I Y II X III X IV I X V I X VI I X VII X VIII Y IX I Y

問 4 傍線部 A「道徳的であること」つまり善悪を区別して善を尊んで悪を卑らんとすることは、「いい人生」と無関係なのではない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 33。

- ① 「いい人生」とは、人間らしく生きることであり、道徳的であることはその十分条件であって、善を行って悪を懲むことがなければ、人生が肯定されることはありえない。
- ② 「いい人生」とは、人間らしく生きることであり、道徳的であることと直接的な関係はないが、最低限の道徳を守らなければ、生物としての生存の保持すら危うくなる。
- ③ 「いい人生」とは、人間らしく生きることであり、道徳的でありさえすれば「いい人生」が保障されるわけではないが、道徳的でなければ、人間らしく生きる前提が危うくなる。
- ④ 「いい人生」とは、人間らしく生きることであるが、道徳的であることは無関係であり、自分の納得のいくように自由に生きてはじめて人間らしく生きた実感が得られるものである。
- ⑤ 「いい人生」とは、人間らしく生きることであるが、必ずしも道徳的である必要はなく、否定的な評価を身へ必要がないければ、人間らしい生は採擇されることである。

問 5 傍線部 B「幸福は関係する」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 無頼派の充実した人生を成り立たせているのは、そのよふな人を認め関わる人々の存在である。
- ② 無頼派の充実した人生を成り立たせているのは、その人に備わった独特の無頼的な個性である。
- ③ 無頼派の充実した人生を成り立たせているのは、奴隷のような、主人に対して死を連う人々の存在である。
- ④ 無頼派の充実した人生を成り立たせているのは、王のように人々を臣下す態度である。
- ⑤ 無頼派の充実した人生を成り立たせているのは、世間との間にある親密な協調関係である。

問 6 傍線部 C「こうした感受性」の内容として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 善を回避する道徳的感受性
- ② 人間的成熟にみちみちる感受性
- ③ 道徳的であるかどうかの判断への感受性
- ④ 善しき行為への道徳的感受性
- ⑤ 道徳性への情報回路としての感受性

問7 傍欄部D「それは、人間らしく生きることを、むしろ著重させる兆候である」の語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 人間が単独者であると考えずきると、お互いに関わりあえる存在同士であるという世界観は奪われ、他者に対して関心を持つべきでもあらう人間の基本を忘れがらなくなる。
- ② 人間が単独者であるという厳しい現実から目をそらすことは、自分の生き方を振りまわすことを求めにし、他者を思いやるという人間の善徳からかえって遠ざかっていく。
- ③ 人間が単独者であることを強調すれば、人間関係の幅が狭まり、自分で自分の人生を肯定する以外に人間らしく生きる道はなくなる。
- ④ 人間が単独者であることに重心を置く、他者と隔絶し交際してゆく社会人としての態度から遠れていくことになり、人間として道徳的でなくなる方向に陥りやすい。
- ⑤ 人間が単独者であることを強調しすぎると、お互いに人間として存在を承認し合い、他者との関係の中で自己を見いだしていく人間らしい生き方を損なうことにつながる。

問8 傍欄部E「このこと」の内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 善悪の目線めがけに敏感になるには、聞き届けられなかつた呻きに道徳的に反応するところが必要であること。
- ② 善悪の目線めがけをおおりにしないこととして、対他存在である上で単独者であるという事実を真に理解できること。
- ③ 善悪の目線めがけをおおりにしないことは道徳的であるために必要であり、そうすれば、その場では聞き届けられなかつた呻きにも敏感になりうること。
- ④ 道徳的であるうえとするとは、同時に聞き届けられなかつた呻きに対してより敏感になつていくこと。
- ⑤ 聞き届けられなかつた呻きに対する敏感だが、道徳的であることとする善悪の運びに比例してはならないこと。

問9 次のア～オの文章について、本文の内容に合致するものは○とし、本文の内容に合致しないものは×としたら、その組み合わせとして最も適切なものを、後の①～⑨のうちから一つ選べ。解答書は 38。

- ア 私たちは「へげへ出まらう」を求めはばけなら。
 イ 「まへまらる」と「まへまらる」とは言葉ではなら。
 ウ 無頼的にまららうとは言葉ではなら。
 エ 単純者としてまららうとは究極的には人生を尊かにする。
 オ 善悪を区別するとしてまららうとは、われをまらるるの甲に敵意をなすことである。

- | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|
| ① | ア× | イ× | ウ× | エ○ | オ○ |
| ② | ア○ | イ× | ウ○ | エ○ | オ× |
| ③ | ア× | イ○ | ウ○ | エ× | オ○ |
| ④ | ア○ | イ○ | ウ× | エ○ | オ× |
| ⑤ | ア× | イ○ | ウ○ | エ× | オ× |
| ⑥ | ア○ | イ× | ウ× | エ× | オ○ |
| ⑦ | ア○ | イ○ | ウ○ | エ× | オ○ |
| ⑧ | ア× | イ× | ウ× | エ○ | オ× |
| ⑨ | ア○ | イ× | ウ× | エ○ | オ○ |